貴重書

皆語成田乃開帳

前編

国
特別
1963
国
241
4

40. 8. 26
ア306531

三浦屋乃絹川
浮世豆腐の累

昔語成田之開帳

山東庵京山作
歌川國貞畫

錦耕堂
山口屋藤兵衛板

全六冊

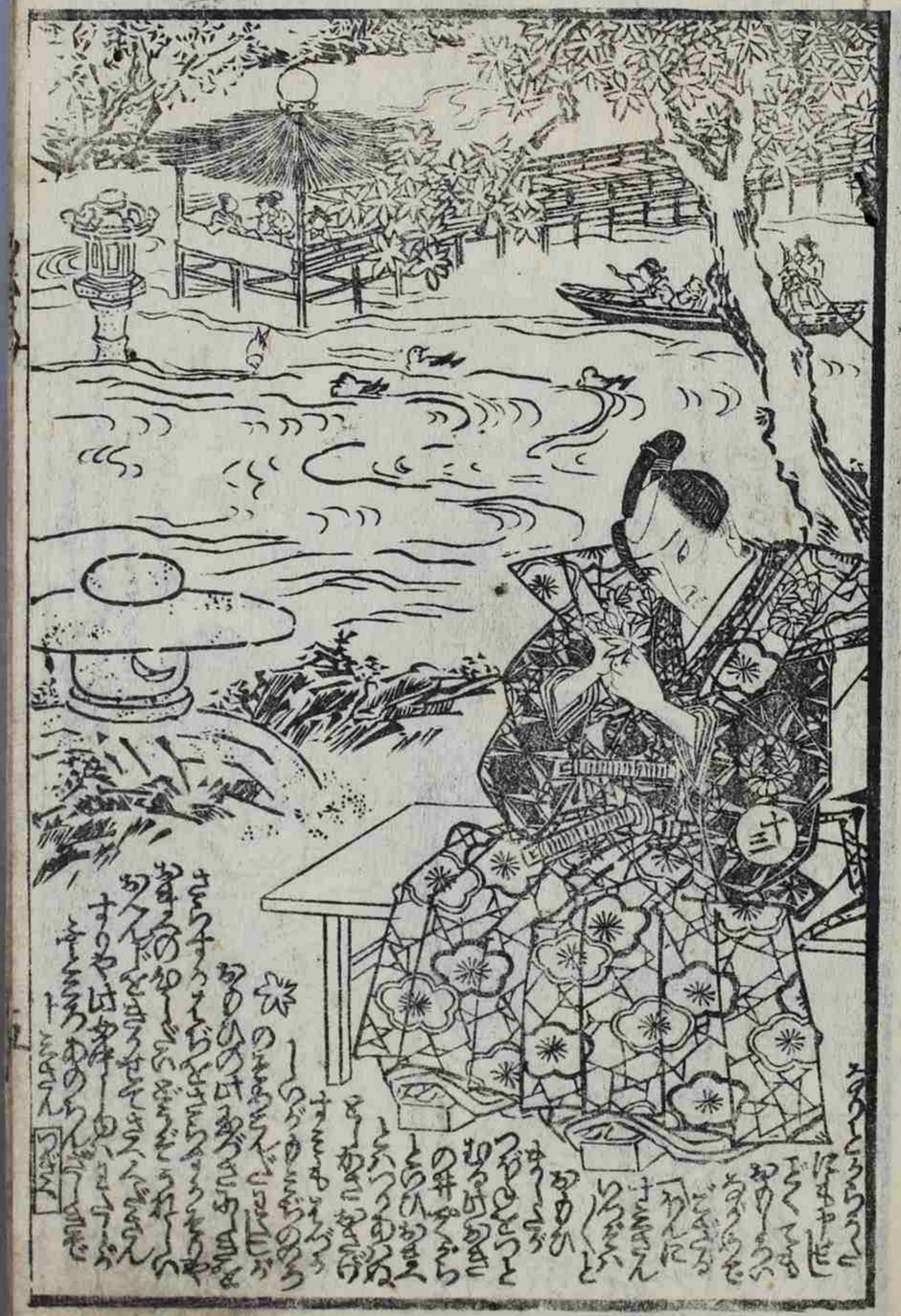
序のまき

花を託て世を忍ぶ心をのべたるは利藻の
[illegible]の[illegible]のよろこび[illegible]者のよろこび[illegible]
の[illegible]を喰ゆ初鰹乃[illegible]
[illegible]生の橘を正月[illegible]冊を文月の松茸とみ月[illegible]
嘯[illegible]
鰹も四月[illegible]
[illegible]
[illegible]

宮城野の判官
頼兼の家臣
今津十三郎
後ふ浮世豆腐屋
羽生屋の
與右衛門
○三浦屋の

○千丸の乳母
政岡
新造
絹川
後に
高尾大夫
○関取
荒獅子
谷蔵

十三
きぬ



かさね二のまち記

○はやちかつとはひろう仕い

骨董集 三編 京傳遺稿京山補訂

女粧圖考 三卷 京山編 はやち上古中古近古

とこぐ〜めるとろ

あの風俗のその時代〳〵ふちさびてゝ

ゆかりあるものはまりうるものをそ

ゆるすべてはやりうるすべてうり

ぶん婦人のそうびつけあぶくりたものの

たまりのにいるまだすべて女の風俗にゝ

ハわびてゝあらさびた趣をいづれ和漢の

考をくはくるべきまて事もしらぬまま

○あぶくりあぶくりこまてうひろめい

男女ともに

懷妊形

ゆかりの月やくのゆめうりたまりをいづれ

るにゆめうり男ハうらにまりをいづれ

ゆのすりこて男にてすこしも男にてるるの色

身をこりうきさのまきのやくゆり

○こゝろをよくもとるたゆのやく

すべてこゝをつゝんとするとき

月のゆきべてゝあつまるハくこゝ門さるとゝ

白ひの人ぶく上ゆるの人ゝも上一色さ

つきべゆるゆんくゝとてゝるゝ

○これゝゝ

ゝゝゝ

戸手

御客前
御燭屋 一対
扇子看板
御火鉢

おき
仁木
十三

國貞画
山東京山作
十三

かさねさんのまき
三

大入叶
橋本
頼

谷

御かぶれ　美艶仙女香　一包　四拾八文

此清くすみて八百保ト一年廿一番乃船主伊勢子九と云る
清洲人長清偶居の時九山丹の逆江屋の遊女翁野ふ
授しる顔の美に奇方ありて宮丹の
婦人常に此墨を用ひ遊とそ右の傳方なりし
手ぶり家ふ伝へる秘此度世に弘むるものなり今世上ふ顔
の美と称するものあり色八いづれも初中終の色
牛どくせる薬なれども家方ハ別段の奇効あれ
世上の顔のくすりとつ列ふ下劣ものなり
功能　京ふ下劣ものなり

国文
24L
43

▲夢に見るくいろと面くきうをとるあとはそけそふよ
▲できこのめくわと城を書く浜久▲いもかわに見て書くといもうの
▲ふきびかわけできこのにかめうろう▲さで城うるわに芋の文
▲ひろに見ゆる人筆こうてきかわに志八のようさけたう
▲ひろ刀一切のできこのにようー▲ひぐのこれあるそうに
めうろう殿のこれ実すもうる正人ようなそうー

調合賣弘所 江戸 南二丁目三丁目 坂本氏

以右のほうそうすれ共上ひりとあるまわ共ぐ御用 三度 ふるい
上すれ共ほうそうの用ぐ歳こひ有りしてそ者すすう

文
図書
年度